

*** 今日の健康 (2月) ***

< コロナ発生から3年 >

日本ではダイヤモンドプリンセス号に端を発した新型コロナウイルス発生から3年が経過し、今後パンデミックの終息をどう判断するのが注目されています。

1日あたりの死者数は、パンデミックが終息しつつあるかどうかを判断する1つの指標で、その他にも、患者数や、流行の季節性、ワクチン接種率、有効な治療法の有無、現在および新たな変異株の感染力などが挙げられます。

実際に新型コロナパンデミックの終息を判断することは難しく、なぜならば新型コロナは新たなウイルスであり、地球規模で私たちは過去にコロナウイルスによるパンデミックを経験したことがないからです。



新型コロナの致死率が季節性インフルエンザ並みに低下するときに、パンデミックの終息と考えられ、おそらくあと半年か1年程度ではないかと推察されています。新型コロナの致死率は、第7波以降で0.13%程度、第5波までの4.25%より低くなったものの、季節性インフルエンザの致死率(0.06~0.09%)より依然として高い状況が続いています。年齢層によっては致死率の差が小さく、若年者で基礎疾患のない方でもインフルエンザと変わらない感染症となっています。

致死率が下がる要因としては、

- ①重症化を防ぎ、副作用や飲み合わせの問題が少ない“優れた内服薬”が登場し、インフルエンザ薬みたいにどこの医療機関でもすぐに処方してもらえるようになったとき
- ②1年に1回程度のワクチン接種で、多少の変異があってもカバーできるワクチンが開発されたとき
- ③新型コロナウイルスが変異を重ねるうちに、病原性が著しく低下したとき
- ④ワクチン免疫が70%を占める我が国において、ハイブリッド免疫(ワクチン免疫+感染免疫)の割合が過半数を超えたとき

と考えられ、「今のところ、上記③と④が穏やかに進行している状況と推察されます。①と②については未だ開発中であり、ゲームチェンジャーと呼べるほどの優れたワクチンや医薬品は登場してきておりません。④が急速に進行する場合は深刻で、終息の時期は早まりますが、感染者が急激に増えることを意味するので、重症化する人が短期間に増加し医療供給体制が逼迫することが懸念されます。④の場合の理想的なシナリオは、医療供給体制の破綻をきたさない程度に、感染予防策の緩和を徐々に加速していくことで、ハイブリッド免疫の割合を増やしていくことです。

早すぎる終息宣言はオミクロン株に対応した追加接種を進めるなかで、重症化リスクのある何百万人もの人に、追加接種を受ける必要はないというメッセージを送ることになりかねず危険であると考えます。

前澤クリニック 内科・小児科 0422-30-2861

天文台通り多摩信用金庫のななめ裏